

「先生のお陰で仕事の方もまずまずで、走ることはずつと楽しめましたから。まあまあ的人生かなあつて」

どのような業種かは判らないが、仕事関係で成功したのだろう。人柄が滲み出ているような面持ちだ。

「あつ、そうそう、先生も昔は名を鳴らしたスプリンターだったんですよ」

「へえ、そうなんですか」

美沙は少し首をすくめて小さく笑った。可笑しかった。お茶の先生のような風情の老女が、ストライドを大きく伸ばして走る姿などは想像もできなかつた。

「調子に乗って少し喋りすぎました」

「いえいえ、そんな」

美沙には話す材料がない。バスの発車時間まであと一時間はある。

「先生はこちらに帰ってくるかも知れないと言っていましたから、もうそろそろ」

三好は入り口の方に首を巡らせている。

「まあまあごめんなさい」

まるで声が伝わったかのように、入り口の扉が開き老女が現れた。

「待っていただいてごめんなさいね。良夫さんもありがとう」

よほど急いで来たのだろう。大きな息を弾ませ、

顔だけでなく手までが紅く染まっているように見える。

「私の方から約束をしていながらごめんなさいね。急に用事ができてしまつて」

すつかり恐縮しているように何度も頭を下

げた。

「先生、掛けてください」

三好は自分の横の椅子をひいた。

「ありがとうございます」

老女はおしぼりとお水を持って来た店の女のひと、三好に交互に礼を言いながら、レモンティを注文した。

「お孫さんは」

三好が聞いた。

「何か忙しいらしいのよ。折り返して帰って行

つたわ。実はね」

レモンティを二口入れて、三好の方に向いた。

「決めてきたのよ。前から言っていたように、あの家ですつと一人で暮らすのね。自分が入るホームを今決めてきたの」

美沙には関係ない話でも、おおむね見当はつく。

「いいんですか、先生」

「良いも悪いも、決めないとね」

「先生はいつも潔い。感服ですね」

三好は感心したように言う。

2

「まあ、そんな。あら、ごめんなさいね。待つてもらったあなたにつまらない話をして」

「どこかへ行かれるんですか」

つい聞いてしまった。

「ええ、子供や孫に迷惑をかけない間に、この際思い切つて、老人ホームへ入ろうと思つてね。」

彼女は顔色を変えことなく、むしろ、にこやかに話す。迷いや悩みなど微塵もないように見える。強い人なのだろうか。

今のこの状況を察知でもしているように、店の音楽が変わつた。

「ドナウ川の漣」が静かに流れてくる。このワルツ曲は美沙の心を揺さぶる。

先日は「ムーンリバー」がかかると、彼女は懐かしい曲だと嬉しがつていたのに、それよりずっと古い「ドナウ川の漣」が聞こえているはずなのに、彼女の今日は眉一つ動かさない。新たな決意に思いが集中しているのだろうか。

「先生、それでいつ」

「六月に入つてと考えているの。良夫さんとももう今までみたいのに、ここで逢うっていうわけにはいかないわね」

「大丈夫です。また訪ねていきますから」

美沙も折角親しくなれそうだったのに、と残念に思う。

「ここでまた逢いましょう」

彼女は、三好や美沙の心象を察したような、親しみの笑顔でそう言った。

三好の「先生と一緒に僕の車で送りますから」の好意を軽く断わり、美沙は店を出た。

バスに乗るまで少しの時間がある。美沙は病院の西側の方に歩きだした。歩きながら、考へてみよう。

まあまあ的人生かなと笑つた三好。

幸せな人生だったから、そろそろ後しまいをすると言う彼女。

五月のたつぷりとした太陽が美沙の身体を照らした。

正面玄関からの出入りだけでは気づかなかつた、

病院の別の姿がそこにあつた。広い庭から国道の方にむいて、等間隔に植えられた街路樹のハナミズキが、花をつけ真っ直ぐにびている。

美沙は眩しげにそのハナミズキを見上げながら、三好がにこやかに言いきつた言葉を思い出していた。

「スポットライト」

そうだ。

「スポットライト」かもしれない。

夫もまたあの時が、生涯にただ一度当てられた。

*

次の日、美沙はいぶかる夫を何とか誘い出し、

〈愛慕里〉へとやってきた。美沙自身だってまだ迷っていた。

老女の決断に比べて今の自分は何と些細なことに気をもんでいるのか、情けない。

あの老女が帰り際に、ふと漏らした寂しそうな笑みは本心だろう。

「主人がいればねえ。ご主人さんが早く元気になるといいですね」と言いながら。

「主人がいれば」

美沙はもう一度考えた。

喫茶店の中には二人ほど客はいたが、老女と三好は当然のように居なかった。二人はそれぞれの居る場所へ向かっているのかもしれない。

夫は久しぶりの外食に席についても珍し気に店内を見回している。今日はまた違う曲が流れていた。

「ねえ、今かかっているのはダンス曲でしょう」
美沙はやりわりと水を向ける。

「うーん、そうだ。たしか、『オー・ゴッド』だったかな。ルンバだ」

夫は初めて気づくように耳を傾けている
気配だ。

「あなたも若い時にはスポットライトを浴びたことがあったわよね」

美沙は、やっぱり柔らかく、さりげなく言葉を選ぶ。

夫は久しく見せたことのない穏やかな表情を浮かべ、まだ曲に聞き入っている。

「ああ、あれかな。一度だけだが」

宙に玲子の面影でも思い浮かべているのだからか。顎を上げている。

美沙はそんな夫を静かに見守っていた。

出し抜けに夫は右手を動かし、

「いや、そうだ、今でも持っているぞ。あの時の写真！」

上着の内ポケットに無意識のように手をやったが、途中で動きが止まり苦笑した。

「ああ、すっかり忘れていた。ここにはないんだ」
小さく呟くような声音だったが、美沙にはは

つきりと届いた。

病室に戻り、洗濯物をまとめると美沙は帰り支度をはじめた。

病室を出ようとする美沙の後ろから、

「今日はありがとう、な」

いつにない野太い声が追いかけてきた。

振り返ると、夫はベッドの上で右手だけを上にあげ、ダンスのホルルドの恰好をしている。

「転んだだけで腕が折れるのは、どうも運動不足かも知れんな」

そんなことは前から判っているはずだと思いつつ、夫の穏やかな顔に誘われるように、美沙

は小さく頷いた。

「よくよく考えたんだが、ダンスと一緒にやらないか」

「えっ。ダンスですか。もうやめて随分経っているんでしょう」

「やろうよ。な」

夫の声に力がこもっている。

「ダンスがいいって。な」

「だって私はできないわ。玲子みたいにはできないわ」

夫は顔色を変えることなく、

「楽しんでやればいいじゃないか。だめか」

即座に言い返す。

「そうね。またゆつくりと考えます」

素直でないと思える美沙の声に、

「ああ」

いつもの返事が返ってくる。だが、気のせいかトーンは少し高く明るくなっているような気がした。

美沙もいつものように「じゃ」と、小さな挨拶で病室を出た。

美沙は自分の目が輝いてきているような気がしてきた。

エレベーターの前で不意に涙がこぼれそうになった。やがて、自分の感情がおさえきれずに涙があふれ、あわてて人目を避けるように階段側の

窓辺に身を寄せた。涙を手で何度も何度も拭いた。

涙でかすんだ目の向こうには、花をいっぱい咲かせた街路樹のハナミズキが凛と立ち並んでいた。

へ了へ

(以上6月11日放送分)